説教20201227　ヨハネ1:1-14 21 21-185 114

「神によって生まれる」

皆さん、クリスマスおめでとうございます。主なる神が私たちに御子イエスキリストを与え、私たちの内に住まわせてくださったことに、心より感謝と賛美を捧げます。

　私たちは、待降節を終え、今、降誕節第一主日を迎えております。クリスマスは、顕現日の１月６日まで続きます。その間４回のクリスマスの説教を聞くことになります。

　さて今回私は、クリスマスの大いなる喜びを言葉で語っていくというのはなかなか難しいことだと思いました。英語には「リジョイス！」という言葉があって、それは何が何でも喜びなさいという表現なのですが、日本語で「喜びなさい」といいますと、時と場合によってさまざまに受け止められると思います。願わくはこのクリスマスの時が、主の大いなる喜びで満ち満ちて、「喜びなさい」という言葉が真に人々の励ましとなりますように。

　さて今日の聖書箇所は、クリスマスの時によく読まれる聖書箇所の一つであります。皆さん、マタイ福音書、そしてルカ福音書のそれぞれのイエスキリスト誕生の聖書箇所はよくご存じかと思いますが、このヨハネ福音書の箇所は、キリストの誕生とすぐに連想して思い起こされないのではないでしょうか。確かに、今日の聖書箇所には、マリアもヨセフも出てきませんし、羊飼いもベツレヘムも飼い葉おけも出てきません。そのような具体的場面や固有名詞は語られないのですが、ここにはクリスマスの聖句として大変重要な聖句が含まれています。それは14節の、「言（ことば）は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」という聖句です。これは、イエス様が人となって、この世にお生まれになって、私たちと共に歩まれたという、いわゆる言葉の受肉の出来事を語っている、とても重要な聖句であります。イギリスの高名な神学者で牧師でもあるウィリアム・バークレーは、この聖句について次のように語っています。「これは新約聖書中、最も重要な一節といえるであろう。それゆえ、私たちはさらに時間をかけて、その滋味に預かるまで、深く入りこまなければならない。これは一生涯かけて学び、考えても、その真理を汲みつくすことのできない聖句の一つである」

　一生涯かけてもその真理は汲めど尽きせず、その味わいは尽きることがないというのはなんと素晴らしいことでしょうか。私たちには、主から許される限り、この聖句を味わい尽くし、大いなる喜びに満たされていくことが許されているのです。その深みへとはまっていく喜びを私たちは共に喜び合いたいと願います。私自身のこととを申しますと、私はまだ伝道師一年目で、その深い真理の、ごく表面の浅瀬に居るようなもので、その大いなる喜びの入口に立っている程度の者ですが、それでも、これから一生涯かけて深められるこの聖句「言（ことば）は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」が与えられていますことを主に深く感謝をいたします。

　さて、今日の聖書箇所で語られています、言葉とは何でしょうか、或いは誰でしょうか、それは主なる神であります。１章１節に「言葉は神であった」と書いてある通りです。さて世の中の人に「言葉は神である」と言って、話が通じるでしょか、恐らく一回話したくらいではチンプンカンプンだと思います。でも、よく説明すればわかることでありましょう。

「言葉は神である」という事が今の世ですんなりと受け入れられないのは、思いますに、今の世で取り交わされています、私たちの言葉というものが、コミュニケーションのための手段としてだけに、低められて考えられているからではないでしょうか。確かに、今の世ではコミュニケーション能力を増すために言葉を用いるという発想が普通であります。分かりやすく流ちょうに、そつなく、相手に不快な思いをさせないよう、快く受け入れられるようにコミュニケーション能力としての言葉を磨いていくという事、それはそれで大事なこと事とは思います。しかし、言葉の持つ深みや重み、又力というのは、それとは別のところにあるのではないでしょうか。

　それは言葉の持つ恐ろしさと言い換えられるかもしれません。日本でも古くは、言葉は、ことと呼ばれ、それは事実としてのコトや出来事としてのコトと同一視されていました。つまりあることを言葉で語ると、そのことはその通りの出来事として実現するといった発想が常識であったのです。それはいわゆる言霊信仰の世界と表現できるかもしれませんが、現代に生きる私たちがその言霊信仰と無縁でないことは少し考えればわかることでありましょう。残念なことにこの言霊信仰は悪い方向に実現してしまう傾向があります。例えばある人のことが憎い憎いと思って、そのように独り言を言っておりましたら、どんどんその思いが高じてしまって、ついにその人と絶交してしまったというようなことが起こります。

　私たちは、普段使っている言葉のこのような恐ろしく深みがあって重みがあって力があるという、その核心部分にもっと目を向けていく必要があるように思います。

　言葉は私たち一人一人に深く宿っていきます。よい言葉を身に着ける者はますますよくされ、悪い言葉を身に着ける者はますます悪くされるものです。このクリスマスの時、私たちが、全き喜びの告げ知らせである主のよき言葉に満たされているという事は実に幸いなことであります。私たちはその主なる神からの恵みを未だ十分に悟りきれていないかもしれません。ですから、私たちは主なる神からの「喜びなさい」という励ましの言葉を焦ることなく着実に受け止めてまいりたいと願います。

さて私たちが一生をかけて深めていく聖句「言（ことば）は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」というのの冒頭の言葉というのの説明にこれほど深いものがありますので、この聖句が一生をかけられるという事の意味が少し明らかにされたのではないでしょうか。

　今日の聖書箇所はマリヤやヨセフそして羊飼いの代わりに、何が語られているのでしょう。それは天に居ます主なる神のことであります。一節の冒頭は「はじめに言葉があった」で始まります。この聖句は明らかに旧約聖書の冒頭の「はじめに神は天地を創造された」を意識しております。ヨハネは、明らかに旧約聖書とのつながりを図るためにこのように語り始めて居ます。では、旧約聖書の冒頭には何が書いてあるのでしょうか。それは神による天地の創造の出来事です。「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。」と語られています。

　全ては神である言葉によって成った、とヨハネは記します。

　私たちは、ここで言葉の持つ広がりという事に目が向けられることでしょう。先ほど、言葉は私たち一人一人に深く宿っていきます、と申し上げましたが、全ては、万物は

神によって作られた、というレベルにおいて、私たちは言葉の広がりや、取り交わしといったことに思いをいたすことでありましょう。私たち一人一人のうちに深く宿り、秘められ或いは沈潜していた言葉の数々は、時が来れば、周りに打ち明けられて、その言葉は出来事となって周りに広がっていくのです。

　ヨハネはその拡がっていく言葉という事を４節で「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。」というように表現しています。つまり神の言葉は、光であって、やがてその光は、周りのすべての人や物を照らし出すという事です。

　しかしヨハネは、その拡がっていく光に対して敵対する人や物ののことも記しています。１０節から、「言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。」と語られます。言葉を受け入れなかった民は暗闇であるともヨハネは言っています。

　広がってゆく神の光、それは今もこの世で、拡がっていますが、それに敵対する人がいることも又事実としてここには記されております。私たちも日々の生活においてこのことを実感することでありましょう。

「しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。」と12節は語ります。神の子となる資格、光の子となる資格、この資格という言葉は重い言葉であります。新しい聖書訳では、これは権能と訳されております。これは神の子となったもの、すなわち私たちのことですが、その者達には権能が与えられているという事です。その権能とは一体何なのでしょうか。私たちが神の子として語る言葉の一つ一つには、権能が付与されています。それは光の子が闇に打ち勝つような、力がある権能であります。

　クリスマス主日礼拝の説教で聞かれました、ルカ福音書の２章１節に「皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。」という一節がございます。このローマ皇帝の発した勅令、すなわち皇帝の言葉には、権威がありました。人々は容易にその言葉に反することはできませんでした。つまり権力者であるローマ皇帝の言葉には民を従わせる権力が与えられていたのです。私たちは、時の為政者が発するこのような勅令、言葉に込められた重み、力を感ぜずにはおられないでしょう。そしてその込められた重みは勅令の発令という形で、周りに広がっていくのであります。

　このような、時の為政者の勅令、言葉と比べて、私たちクリスチャンの発する言葉の一つ一つが持つ権能とは如何なものでしょうか。私たちがしゃべる言葉にそんな権能が与えられているなんて、と言ってそれを実感できない方もおられるかもしれません。しかし私たちが語る言葉の一つ一つには、確かにローマ皇帝の勅令に勝る力が秘められています。私たちは教会の小さな群れですし、この世的には何の政治力も持ち合わせてはおりません。私たちが権威ぶって、周りに主なる神を誇る物言いをしてもそれは伝わるものではありません。では私たちに与えられたその権能を支えていることとは何でしょうか。それは私たちが主なる神を信じる信仰であります。ベツレヘムでの主イエス様のご誕生の場面を思い起こしてください。ヨセフもマリアも、勅令に従ってベツレヘムに旅をしましたが、この二人を支え導いたのは、神のみ言葉であり、そのみ言葉が人となりイエス様となって、彼らのうちに与えられました。その深い喜びの源は、彼らが神の言葉を信じそれに従ったという事であります。神の言葉を信じそれに従った、ヨセフとマリアにはローマ皇帝の勅令に勝る権能が与えられたのです。

　１３節には「この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。」と記されておりますが、マリアもヨセフも血によってではなく、また肉の欲によってではなく、また人の欲によってでもなく、神によって生まれたことを選ばせられたのです。

　私たちが神によって生まれた、という事は、言葉の広がりのうちに、告げ知らされなければわかることではありません、私たちはこの信仰を、臆することなくこのクリスマスの時に喜びをもって隣人に告げ知らせてまいりたいと願います。

お祈りいたします

天に居ます私たちの父なる神よ、このクリスマスの時にあなたは、私たちに最愛の独り子イエスキリストをお与えくださいました。私たちはイエス様によって今、生き生かされています。この計り知れない恵みに感謝し、あなたに賛美をささげます。

　私たちがこのように神によって生まれたという、驚くべき出来事を、今この時に大いなる喜びをもって、周りに語り伝えていくことが出来ますように。私たちの内に宿るあなたのみ言葉を私たちが周りに解き放っていくことが出来ますように、私たちを守り導いてください。

　今、この世の中は大きな試練の時を迎えています。私たちは、その試練の中にあって、暗闇になることなく、神の子、光の子として、隣人を励まし、恵みを与える者とされますように。

　今あなたのみ言葉が肉となって、この世界中に宿られています幸いを覚えます。この世で肉を着て生きている私たちが、常にあなたのみ言葉に聞き従いつつ生活し、あなたから与えられましたこの霊と肉とを大切にして、日々の生活を味わっていくことが出来ますように。

　この一週間のうちに、新たなる年が与えられようとしていますが、この静かな年末年始に私たちが、世界に遠く離れたとなりびとたちを思いやって、その一人一人の、主にある幸いをお祈りすることが出来ますように

父と聖霊とともに一体であって代々に生き支配されておられます私たちの救い主イエス・キリストの